令和７年度　第４回がまごおり協働まちづくり会議　会議議事録要旨

日　時　令和８年３月９日（月）午前１０時～
場　所　蒲郡市役所　本館３階　３０４会議室

１　開会

２　議題

⑴　協働のまちづくり推進事業について（別紙１）

事務局より、令和７年度事業報告、令和８年度事業予定について説明

・今年度まちづくり事業助成金を受けた３つの団体は、次年度申請しないということだが、この助成金は継続した事業実施を条件として補助している。どのような経緯で次年度申請しないことになったか教えてほしい。また、来年度の申請が１団体となった経緯も教えてほしい。

・３団体とも助成金の資金は求めないが、事業は継続していく。

チャラボコは、これまで個々で活動していたが、助成金事業により一同に会して活動を行うことができた。他の団体からの刺激もあり、各団体のやる気や意識の高まりにつながっている。学校からの依頼も増えており、対応できる団体が増えた。また、地域との連携が喜びにもつながっている。

ロープ結びもニーズが増えており、学校だけではなく、子ども園からも声がかかっている。想定以上に外からの声かけがあり、体制づくりよりもニーズの広がりへ対応している状況。参加者からボランティアの志願もあり、ニーズ対応と体制づくりを両立させていけるようにサポートしている。

阿波踊りについては、イベントではなく移住者との関わりが重要であることを伝えながらサポートしている。今回のイベントでは、移住者は、移住者という旨を強調されることを喜ばないことが分かった。企業からの協賛もあるとのことで、次年度も活動は続けていくが、どう移住、定住につなげていくかについて、引き続きアドバイスしていく。

・令和８年度の応募が１事業になった経緯について、エントリーした１事業以外にも、２事業から相談があった。２事業ともに立ち上げ的な相談で、目標や体制が整っていない中で、時間的に間に合うかどうかということもあり、チャレンジ助成金への申請を検討している。具体的な事例として、がん患者のコミュニティづくり、孤独・孤立に関するコミュニティづくりについては、当事者と社会の関わりをどのように持たせていくのかなど検討が必要なため、現段階ではチャレンジ助成金の情報提供させていただいている。

・チャラボコ連合会の取り組みについて、資料では、同じ歩幅で動くことが難しい、課題であると書かれている。連合会として大きなビジョンを共有することは大事だと思うが、やり方や進め方をみんな同じようにやるべきかと言えば、違っていてもいいのではないか、それぞれの体制や立ち位置を踏まえてやっていくも

のか、とも思うと、ここの意味合いを確認させてほしい。
・連合会を立ち上げた当初は、各団体をどれだけ統一できるかという発想を持っていた部分もあった。各団体はそれぞれ、地域や学校との関わりも違い、目指すものが統一されていない感じはしていたが、この先、連合会のメンバーが、支え合い協議会などに参加し、地域との関りを深め、それぞれ感じたことを連合会の中で共有することにより、ネットワーク的にビジョンが広がっていけるとよいと思っている。
・課題と書くと解決しなくてはと思うので、それぞれが違う状況を活かしながら、というニュアンスかと思う。
・中央小の地域協働活動推進員をやっているが、チャラボコ保存連合会ができる前だが、地域を知る機会として地元のチャラボコ保存会に来ていただいた。連合会ができたことにより、よりお願いしやすくなったと感じている。子どもたちは、法被を着せてもらい、手ぬぐいをもらえて喜んでいた。中央小の児童はチャラボコがない地域の児童もいるため、チャラボコを知る機会になり、地域によって曲が違うということも分かり、良い体験となっている。
　蒲郡 rope-MUSUBI-association さんにも来てもらっており、これからも６年生のコサージュづくりを継続していきたいと考えている。
・学校など、他との連携があると活動も目立ってくるため、いい意味で依頼しやすくなるが、一方でそれが団体にとって負担になる面もある。
他にも地域では様々な活動がされているので、色々なところと連携できるとよい。
・笹野さんにも魚のさばき方など、お願いしたいと思っていた。
・ぜひ呼んでください。さばきの授業は、令和７年度は市内の小・中・高１８校で行っており、公民館では親子を対象に行っている。学校での授業を続ける中で嬉しいことが起きており、教えた子が、教える立場になってきた。ラリー三河湾では、東部小の子がブース出展し、教える立場となり実施した。先生たちには、６年生が５年生に教える形での授業をお願いしており、できると良いなと思っている。
・ごりやく市では、色々な人にご協力をいただきながら、子ども商店を行った。今後も多くの人とつながり、ご協力いただきながら取り組んでいきたい。
・活動を通して、様々なところでつながりが生まれ、広がっていくところが面白いなと思う。
・共生社会づくりについて、賀詞交歓会などの際に、ユニバーサルツーリズムをやりたいと話をしていた方がいたが、今回の事業には関わっているか。
・一緒に関わってもらい、検討を進めている。
・共生社会づくりという言葉は、３０年～４０年程前から使われ始めたと思うが、今、共生社会づくりと言えば、障がい分野に限らず、多文化共生社会や地域共生社会など、様々なところで重なってくると感じている。だからこそ、障がい分野の中でまだまだ解決できてないところに焦点を当てるという話もあるだろうし、他方で、ごちゃ混ぜで考えれば、障がい分野、子ども分野、高齢分野、福祉分野、外国人分野など、それぞれの分野でそれぞれのことをやるという、共生社会の縦割り化というのは気にかかるところであり、勿体ないとも言え、意識しておいた

方がいい視点かと思う。色々なところで共生社会と言い始めているからこそ、マジョリティじゃない側の人たちをどう取り込んでいくのかは考えないといけない。
・企画の背景としては、市民まちづくりセンターに様々な分野の方からの相談が増えているということがある。傾向として、広がりというよりも深まりが始まっているのかなと感じているのが、この共生の分野で、専門学校や大学、企業の方の方から講師を紹介してほしいとの相談がきている。共生社会への対応について、お客側ではなく、スタッフ側、受け入れ側への対応が始まりつつあると感じている。
　他方、社会福祉協議会からは、学校から福祉実践教室の依頼があった際のボランティアさんが高齢化しており、ボランティアさんを増やしていきたい旨の相談も受けている。
　指針のワーキングの中で福祉実践教室をやってみて、学校でやっている内容をそのまま企業等で使えるものではないこと、また、企業の専門性を活かしたアプローチもできることが分かった。
　共生社会づくりに向けては、関わる人の分野を広げ、たすき掛けで相談に応じられる体制づくりを考えていく必要性を感じており、市民まちづくりセンターだけではなく、社会福祉協議会や商工会議所と連合を組んでやっていく方が、より意味合いが深まっていくと思っている。
　福祉への理解を社会へ広げようとすると、義務的に受け取られることが多いが、逆に、社会から求められ始めているタイミングを好機と捉え、義務を広げるのではない別の形で理解が広がっていくような展開を進めたいと考えている。
・枠の中での学び合いは、学び合うことは多くあるが、なかなか枠を超えられない。このプログラムは障がいの分野のプログラムだよね、とならないようにする仕掛けが枠を超えるためにも大事ではないか。課題的とか、可哀そう、義務的というところも越えなければいけない部分なのかなとも思う。
障がいの分野を含めて、新たなステージというか、従来の発想を超えてやっていかなければいけない時だと思う。例えば、ヘラルボニー社の事業でも、様々な意見はあるが、従来のやり方とは違う見方で行うことで、色々な可能性や希望などが生まれている。３か年を予定した事業のようなので、従来の型にはまらないやり方に是非チャレンジしてもらえると良いと思う。
　障がい別の経験を語ることも大事だと思うが、どういう狙いでやっていくかによって、そこに色んな広がりや関わりなども出てくるのではないか。緩やかに関わることがすごく大事になってきているので、従来の発想にとらわれずに進めてほしい。
・障がいを持っている人の不利益を伝えるとあるが、障がいの特性を活かせると良いと思う。健常者より突出して何かできる方もいる。特性を活かすことが認めあえる社会にもつながるのかなと思う。
・若者居場所づくりについて、市が支援し、民間事業者が行うと書いてあるが、これは１つの事業者なのか、複数の事業者なのか。居場所づくりは難しく、ある事業者がやる居場所は、ある人には合うが、ある人には合わないということは容易に想定できるので、多様な民間事業者が様々な取り組みをする方が面白いので

はないかと思っている。
・詳細は子育て支援課が進めていく。公募でやるのであれば、その中で複数事業者が関わるような提案があることも考えられるし、協働モデル事業の中で、中高生と一緒にワークショップなどを実施した楽笑さんがノウハウもあるので、どのように進めていくかは現時点では分からない。
・居場所づくりは事業者ができる話ではなく、居場所かどうかは、そこにいる中高生が決めることなので、そこを気にかけながらやらないと、無理して人を呼ぶようなことは違うと思うし、単純なものでもないので、むしろ色々な人が、色々な形で色々なものにチャレンジするところになった方が合うのではないかと思う。
・共生社会について、障がいがある、ないというより、色んな人が雑多にいる方が良い。ご家族でさえも障がいを認められないという現状もあるので、本当の理解というのは難しいなと思っている。
・障がいのある方は、優れた能力を持っている方もいて、特技を生かせるボランティアなどがあればいいなと思う。
・まちづくり賞を受賞し、クラフトセンターの鈴木さんや志村さんなど、本当に喜んでくれた。今まで続けてきて良かったね、という言葉もいただいた。これを機に次世代を育てようという話もあり、みんなの気持ちが盛り上がってきたなと感じている。もうちょっと頑張ろうかなとも思えた。
・居場所づくりについて、中３の子が子ども食堂のボランティアに行っており、すごく楽しそうに参加している。学校や家でもない居場所があるというのはすごく良いなと思っている。建物や場所ではなく、自分が楽しく居られる人たちがいるところが居場所になると良いと思っている。
・ロープ結びでは、形原中学校で、上級生が下級生に教えるということが４年間続いているが、推進員の方が OB 会を立ち上げてくれ、卒業生が在校生に教えるという動きが出てきている。こども園での授業では、小学生以下の子どもに言葉で伝えることの難しさを実感した。動画を見せると理解度が上がることが分かったので、教える方のレベルも上げていきたいと思っている。
・この助成金で広がっていった事業がその後どのようになっているのか、どう派生したのかについて、積極的に確認し発信していくことも大事だと思うので、そういったことも考えてほしい。
・まちづくり事業の助成金を通じて、利用団体の活動の認知度も上がっていると感じる。取り組みに違いはあるが、いい刺激を受け合い、ボトムアップに繋がっているようにも感じており、助成金の目的を達成できているのかなとも思う。さらに活動の幅が広がっていくことを期待したい。
・社会福祉法人が、デイサービス等で使ってない時間帯に場所を子ども食堂に貸している事例があるが、社会福祉法人は移動手段を持っているため、普段は行けない人が子ども食堂に行くことができた。うまく連携していくことによって、色んなことができ得ると思う。
・自治会、町内会では、寄り合いが成り立たなくなってきている中で、地域で子ども食堂が始まり、そこに高齢男性も集まってきて、そこが失いかけていた寄り合いの場になりつつある例もある。

・まちづくり助成金について、助成をした事業がその後どう発展したのか、その後のつながりなどを積極的に確認し、発信していくことは必要と感じた。今後取り組んでいきたい。

３　その他

＜令和８年４月１日付け機構改革について＞

「協働まちづくり課」から「共創共生課」に名称が変更となり、「みらいキャンバス準備室」が新設されます。

・共創共生という言葉を受け、重たいことをやるなと思うが、どんな意味合いがあるのか。

・まちづくりにおける協働の取り組みの中で、共創共生を進めていくということで、課題解決だけではなく、価値創造も含めてやっていくというもの。みらいキャンバスについても、単なる建物ではなく、地域の活動、思いが集まった施設の形でスタートしていこうというもので、協働のまちづくりについても、共創という考え方を加えたものにするということがあるが、具体的には、皆さまのお考えもいただきながら進めていきたい。

・共創に共生を付けるのが相当大胆だなと思う。

・多文化共生も男女参画、地域活動も含めまちづくり全般の中で共創という概念をもう少し取り入れて行っていきたい。

＜令和８年度の会議予定について＞

・第１回　６月頃
・第２回　９月頃
・第３回　１２月頃
・第４回　２月頃